

第 32 回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）報告

令和元（2019）年 11 月 19 日に国立民族学博物館内において第 32 回月例会を開催いたしました。日本学術振興会特別研究員 PD・民博外来研究員である崎田誠志郎氏が、「日本とギリシャの漁場利用・管理を通して考える小規模漁業研究の発展性：2019 年国際コモンズ会議での経験を交えて」というタイトルで発表し、日本とギリシャの漁業組合を取り上げ、それぞれの特徴を明らかにしました。

北東アジア地域研究館内構成員 4 名、館内研究者 1 名、外来研究員 1 名、総研大学院生 1 名の合計 7 名が参加いたしました。

【発表要旨】

発表者は、小規模沿岸漁業者による漁場の利用と管理のあり方に関心を寄せている。当初は主に日本の共同漁業を対象としていたが、2015 年からは地中海ギリシャに研究の展開を求めて現地調査をおこなってきた。今回の発表では、日本・ギリシャ両国における小規模漁業の現状について紹介したのち、日本からは和歌山県串本町のイセエビ刺網漁を、ギリシャからはメソロンギ（Messolonghi）におけるラグーン漁業を取り上げる。これによって、両国における小規模漁業研究の重要性や比較可能性について議論したい。また、発表者は 2019 年 7 月にペルー・リマで開催された国際コモンズ会議（XVII Biennial IASC Conference）に参加し、串本のイセエビ刺網漁の共同管理について発表した。そこで今回は、会議における研究発表の傾向や質疑の内容などについて紹介し、国際的な議論の潮流にいかにかコミットしていくかについても検討する。

